



自己責任？

スタジオ・ジブリのアニメは、アカデミー賞でも話題になった「もののけ姫」を初めとして、多くの人に親しまれていて、君たちも色々な作品を見たことがあるに違いない。私は、「トトロ」の中の木が大きく空に向かって伸びていくシーンに感動したりするが、個人的には、楽天的な登場人物たちが魅力の「天空の城ラピュタ」が一番好きかも知れない。

ところで、先日、そのジブリのもう一方の旗頭である高畑勲監督が亡くなった。そのことに関連して、次のような記事があったので引用してみよう。(朝日DIGITAL 19日)

*

「火垂るの墓」自己責任論

高畑勲監督は「予言」した？

5日に亡くなったアニメ監督の高畑勲さんの代表作「火垂（ほた）るの墓」。戦争に翻弄され、悲しい最期を迎える兄妹を描いた作品だが、主人公の行動に対して「自己責任」論のような見方が生まれている。一方で、こうした批判を見越したかのような1988年公開当時の高畑監督のインタビューが「予言めいている」と注目を集める。

死去を受けて13日、日本テレビ系で急ぎよ「火垂るの墓」が放映された。ネット上には戦争のむごさを改めてかみしめる感想が並ぶ一方で、悲劇的な結末を招いたのは「自業自得」というような言葉も目立った。

主人公・清太と妹の節子は、父親の出征中に空襲に遭い、母親を亡くす。親戚のおばさん宅に身を寄せるが食事の内容に差をつけられたり、「疫病神」と嫌みを言われたりすることに耐えられず、横穴で2人きりの生活を始める。しかし、節子は栄養状態が悪化し、

やせ衰えて死ぬ。

「我慢しろ、現実を見ろ、といった冷淡な意見が多くて驚いた」と映画ライターの佐野亨さん(35)。戦争で理不尽な状況に追い込まれた、弱者であるはずの清太の問題点を強調する風潮が気になったという。

自己責任の賛否を巡るネット上の応酬の中で脚光を浴びたのが、公開当時に「アニメージュ」誌(徳間書店)に掲載された高畑監督のインタビュー記事(88年5月号)だ。

監督は「情動的に清太をわかりやすいのは時代の方が逆転したせい」と語る。清太の行動は現代的で、戦争時の抑圧的な集団主義の社会から「反時代的な行為」で自らを解き放とうとしたと、観客が共感できると考えていたとうかがえる。一方で、こう続ける。

「もし再び時代が逆転したとしたら、果して私たちは、いま清太に持てるような心情を保ち続けられるのでしょうか。全体主義に押し流されないで済むのでしょうか。清太になるどころか、(親戚のおばさんである)未亡人以上に清太を指弾することにはならないでしょうか、ぼくはおそろしい気がします」

公開から30年、日本ではいたるところで自己責任論が起こり、時代を反映して映画の見られ方も変わってきた。佐野さんは「戦時下の混乱のなか、自分が清太だったらどんな判断ができるのか。そういう想像力の欠如が弱者へのバッシングにつながり、全体主義をよみがえらせかねない。高畑監督はそこまで予見していたのでしょうか」と話す。

*

「火垂るの墓」を見た人、どう思う？